

教師を大切にする教育改革へ

全国個性化教育研究連盟常任理事 久保田 滋（芦屋大学）

ほぼ 10 年毎に繰り返してきた教育課程の改訂作業が進み、本年暮れには告示されることがほぼ明らかになった。

今回の改訂については（1）「ゆとり」をもって「生きる力」を育成できるようにする。（2）教育内容を厳選して基礎・基本を徹底する。（3）一人一人の個性を生かすことができるようとする。（4）豊かな人間性とたくましい体をはぐくむために改善する。（5）横断的・総合的な学習を推進する。を目標に改訂作業が行われてきた。

今回の作業の主なものひとつは、授業の総時間数を削るという課題である。このことは 21 世紀に向けて画期的な制度変更によってこれらの学校教育を改革していくこと。削減するのは土曜日分の週二単位時間とする。

もう一つは、先ほどの項目にあった「総合的な学習の時間」を新設すること等であり、その目指していることは「みずから学び、みずから考える力を養い、個性を生かす教育を充実し、各学校が創意工夫を生かした教育」を目指すこと。

「ゆとり」の中で「生きる力」をはぐくむとの方針で、小・中学校で現行より三割前後減らして、基礎的な内容を全員に身につけさせることを主眼としている。そして、自分から課題を見つけて学び方を身につける。「総合的な学習の時間」の新設は現行の時間削減によって生まれたものであり、今後大きな意味を持ってくるのではないかと考える。

その運営は各学校の創意工夫によって運営されるとしている。しかし実際に行うのはこの授業を行う教師であり、日々苦労の連続となることは明らかである。

しかも、この内容は 2 「各学校段階等を通じる教育課程の編成及び授業時数等の枠組み」の項目の（2）ア、イ、ウ、エ、オの 5 項目に詳しく掲載されている。教科の縦割りを越えた内容で国際理解、外国語会話、情報、環境、福祉などについての横断的・総合的な学習……と細かくある。イ項目では自然体験、ボランティアなどの社会体験、生産活動そして体験的な学習もあり、ものづくり、観察、調査、実験と羅列されている。

ここまでを検討して、実に細かく指示されすぎているように思えるし、既に具体的テーマが決まっているように見え、これで創意工夫を求めているといえるだろうか。

しかし今後現場の教育にあたる各先生方や研究会の所属する方々によって横断的な「総合的な学習」の内容や創意工夫の実体験によって行った指導を通して得た成果と、内容をまとめて研究成果としてお互いに利用していくことが重要であると思っている。

また、中間まとめの初めに「学校は子どもたちにとって、のびのびと過ごせる楽しい場でなければならない」とあるが、このような学校であるためには、とりまく環境を整えることがもっとも大切と考える。このことから、児童・生徒を教える教師のことを最優先してしかるべきと思うのである。教師に教えやすい環境を整え、1 学級当たりの生徒数を少なくすること。持ち時間の減少、そして入試制度を改革していくこそ 21 世紀の教育が発足するときと考えたい。次の改革に向かってお互いに協力しようではありませんか。教師を大切にしない国は滅ぶるといわれている。)

全国個性化教育研究連盟学期研究会 [総合学習の考え方・進め方] Part IV

[期日] 平成10年5月23日(土)

[会場] 東京 上智大学7号館

総合学習をテーマにした学期研究会も、今回で4回目を数える。小・中の実践報告に加え、東京学芸大学の平野先生をお迎えしての講演という内容で行われた。

[日程]

①開会行事

②実践事例研究

○小学校 「和紙づくり」

○小学校 「生命、不思議発見！」

○中学校 「まちづくり学習」

③協議

④講演

○「子どもが求め、追究する総合学習」

東京学芸大学助教授 平野 朝久先生

⑤まとめ

○上智大学教授 加藤 幸次先生

⑥閉会行事

実践事例研究

①「大正和紙を作ろう」

発表 東京都台東区立大正小学校

五十子晴美



大正小は平成6年に改築され、全館冷暖房、学年ごとのフロア、中学校や幼稚園、公民館との複合など、特色のある学校である。

(今年の夏期研修会、2日目の会場です！)

総合学習を始めるに当たり、教師は願いを持って子供の意識づけをしていくが、児童の意識の高まりについては、決して無理強いしないという方針で学習に当たった。

実際の学習は、社会科見学での和紙作りの体験をきっかけとしている。見学後、その時のビデオを視聴し、話し合いをしていく中で「自分たちだけで和紙作りができるのか」「牛乳パックを使えばできる」「やってみたい」という声が強くなった。さっそく、グループ毎に紙作り

工房を組織し、ワークスペースに各工房の作業場所を設けたところ、子供たちは、「ボンバーズ工房」「和紙一番」など思い思いに名前をつけ、自分たちが作りたい紙についてこだわりを持つようになった。グループごとに、専門家に聞いたりと試行錯誤する中で、独自の作品をよりよく作りたいという「こだわり」は強くなるとともに、作品を発表したい、みんなにプレゼントしたいという活動に広まっていった。また、6年生から展覧会用の短冊の注文を受け、仕上がりの悪い作品を出さないように注意をしたり、納期を守ろうと休み時間や放課後にも製作したりとよくがんばり、満足感を得ていた。

さらに、製作過程で道具を工夫したり、職人の苦労に触れたり、電気や排水などのトラブルに対して自主的に解決を図ったりと、学習は文字どおり総合的になっていった。

この児童の追求する姿勢や学習の広がりは、他教科の学習にもつながってきていた。

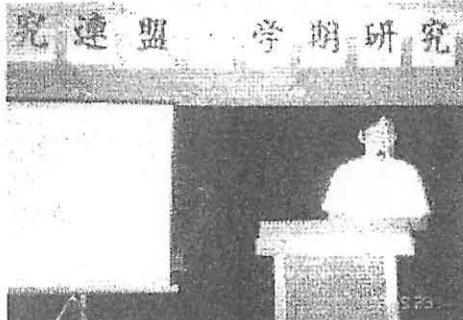
(松浦盛人)

②総合的な視野に立つ「発信」型学習のあり方に関する研究

一身近な「まちづくり」学習を通して一

発表 千葉県八千代市立勝田台中学校

嶺岸秀一



午前中の提案の2番目は、嶺岸先生の萱田中学校における実践例「まちづくり」の授業実践についての提案だった。

身近な存在である八千代市について知る=「とらえる」、夏休みの調査活動によって「深める」、調査活動のバビリオン型の発表会において「広げる」、5極のロールプレイシミュレーション型のディベートを通じて「問い合わせ・表現する・選択する」という段階を踏んだ指導計画に続き、生徒の内発的な疑問や関心を組織

していくダイナミックな実践例であった。

それぞれの段階ごとに、生徒の待ちに関する関心や評価をポートフォリオに蓄積する手法や、夏期休業を利用した調査活動など、「総合的な学習」の種(シーズ)となりうる示唆に富んだ実践であったといえよう。(秦文男)

③バリアフリーな教育環境の創造

うたせ学習(総合的学習)を中心とした
発表 千葉県千葉市立打瀬小学校 三浦信宏
安達幸



過日の新聞報道と実践は異なることを話され、「子供は未来からの留学生」「個性重視」「町に開かれた学校」「きらりかがやく子」「眞の学び舎」「バリアフリーな教育」「学年共同担任制」などをキーワードとした打瀬小の実践概要が報告された。

次に、総合的学習としてのうたせ学習の分類と構造が報告された。横断的学習としてのうたせ学習A、子供の思いや願いから作られるうたせ学習B、卒業研究としてのうたせ学習Cがある。この分類は子供の側から学習を考えて分類したのである。この学習は活動から内容を考えている。学習の目的は学び方を学ぶことであり、主体的な学習をし、自分さがしを行う中で、生きる力をつけていくものである。最初は教科から持ってきて時間を設定したが、現在35時間は学校裁量の時間である。1・2年生は生活科を核にうたせ学習を実施し、活動の結果として教科で取れるように時間を設定している。

最後に、5年生「生命・ふしげ発見」の実践が発表された。ある児童の「人間は他の生命をさせにしてもよいか」という発言をもとに討論会を行い、ここから学習が広げ、3月には「生命」についてのイメージを自分なりの表現でまとめた。学習経過はクリアーファイルに入れ、個人カルテとして意識の変化を教師が見た。児童は自己評価を行い、学習の発展のヒントとした。(加藤勇)

研究協議

○小学校部会

[指導者]

国立教育研究所室長 高浦勝義
国立教育研究所研究員 奈須正裕

○中学校部会

[指導者]

上智大学文学部教授 加藤幸次
東京学芸大学助教授 浅沼茂

・時間設定について

大正小では、週3時間を取りている。放課後なども利用して実践を行った。打瀬小では、本年度は学校裁量の時間35時間を全て総合学習の時間とした。

・バリアフリーについて

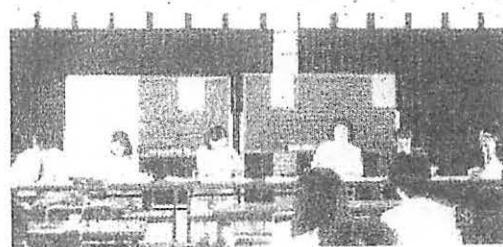
地域に開かれた学校にするために、学校だよりを地域全体に配り、実践内容などを記事にしている。学級懇談会は教育を語る会と位置付けるなど、情報を地域に出している。

・年間指導計画の作成について

打瀬小では1学期の実践を夏休み中に修正し、他の教員の意見を聞きながら2・3学期のプランを作り実施する。前年度の実践をもとに、4月に年間計画を作っていく。大正小では、これまでの実践を整理し、学校全体の計画を作成する予定である。

・高浦先生

総合的な学習の時間のねらいなどをおさえ、学習の改善に向けて取り組む。その中で、一つ一つの単元の指導計画を頭の中で作り、そこか



ら
年間指導計画へつなげて行く。どんな単元があるか、どんなねらいがあるかなどを、今、集めておく必要がある。

・個人カルテについて

教師は個人のプリントに支援の言葉を入れることによって、自己評価による学習の振り返りの様子や成長が分かる。単元のカリキュラム評価や支援の方向が考えられる。

・奈須先生

子供の姿に則して考えると、カリキュラムとは学習履歴である。心積もり・願いは教師にあり、4月には周到に計画を作る。実施する途中で計画が大きく変わり、修正するという繰り返しの中で子供の願いに基づいた計画ができる。力量がないということは、子供を知らないことである。

・総合的な学習はうたせ学習AとBのどちらに近いのかなど。

総合的な学習には両方必要である。ここでは集団やグループで課題を追及している。うたせ学習Cも大切であり、これは個人で追及している。総合的学習は生きる力をつけることであり、課題を追及していくと、結果として教科の視点があることが分かる。

・内容と目標との関連をどうしているのか

テーマを作成すると教科が関連していく。5年「スカイカラーニュース」の実践では、理科・社会科・国語・音楽の学習が関連して一つの単元となった。

・高浦先生

生きる力・問題解決学習・ポートホールオ評価などは、総合的な学習だけでなく教科でも行う必要がある。生活科の延長に総合的な学習がある。総合的な学習では、認識が目的ではなく、実践的な課題が目的となる。

中学校部会でも午後からの分科会に、多数の出席者を得て、質問が集中した。中学校・高等学校で「総合学習」の試行を行うまでの時間確保や、生徒の内発的な興味関心から出発できる「総合」についても活発な議論が展開された。

(加藤 勇・秦文男)

講演

「子どもが求め、追究する総合学習」

東京学芸大学助教授 平野朝久先生

子どもに今、何が大切かと考える必要がある。「体験的・活動的学習で今までの目標で進んでいく限り教育の抜本的改革にほど遠い。」伊那小を初め十数年間総合に取り組んできた氏は、総合学習を以下の2つに括られた。

- ① 「はじめに子どもありき」
- ② 「はじめに内容ありき」

「はじめに子どもありき」の視点では、本来子どもとはどんなものかと問い合わせ直すところから

(事務局へのお問い合わせ・連絡先)

〒115-0044 東京都北区赤羽南 1-16-2-504
03-3903-4780 庶務部長 佐久間茂和

始まる。子どもの興味・関心を大切にする。子どもにとって学習とは学ばなければいけないものではなく、求めて学ぶものであるべきだとされた。この視点に立った総合は子どもにとって自然で必然性がある。子どもは本来能動的な学習者である。その子どもがもてる力を發揮し、全力で取り組むことから生きる力を育まれる。

かたや「はじめに内容ありき」で生きる力が育めるか。習得すべき内容が決められ子どもがそれへ向かって進むだけである。

次に、実際学校独自のカリキュラムを作る際、年間指導計画の表には教科書の単元より、文部省が出している指導書の内容の方がとらえやすい。指導書には、内容の時数は書いていない。学校独自に工夫できる。

また教師はその内容を読みとる力を持つ必要があると結ばれた。(太田 始)

まとめ

上智大学文学部教授

加藤幸次先生

冒頭に「なぜ私達は総合的な学習へ移行できないのか。」「なぜ、今のような教科学習になってしまったのか。」について今考えているとされた。

学習に入るときの問題の設定にその要因の一つがあるのではないか。ここには、「What(何を)」「Why(なぜ)」に鍵が隠されている。この区別をしっかりとすべきと提案された。

今日の日本の中学校、高校での授業のほとんどが「What」でなされている。これでは、知識・理解で終わってしまう。

「物事は」なんだ?」から始まる。」

学習に置き換えると「Why(なぜ)」を求めるければ追究活動が成立しないのではないか。「なぜ」と問われなければ問題解決・課題解決になりにくい。

また、追究活動が成立するには、子どもにとって「身近」で「切実」な問題であることも大切である。このことについてご息女の学習経験をもとに触れられた。

最後に今までの教科は「What」という学習をしているうちに変質してしまったのではないか。

総合に限らず学習は本来「Why」ではないか。しかし、実践は難しい。でも、これからは「Why」を考えいかなければならないと結ばれた。

(太田 始)

全国個性化教育研究連盟会報 第47号

平成10年7月11日発行

編集責任者

事務部長 高浦 勝義

編集

広報部 グループ埼玉